

ふじのくに地球環境史ミュージアム紹介

山田和芳

ふじのくに地球環境史ミュージアム 〒422-8017 静岡県静岡市駿河区大谷 5762 e-mail: kazuyoshi2_yamada@pref.shizuoka.lg.jp

Introduction of Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka

Kazuyoshi YAMADA

Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka Oya 5762, Suruga-Ward, Shizuoka-City, 422-8017, Japan

Keyword: Shizuoka Prefecture, Anthropocene, Environmental History, Provoking thoughts

はじめに

ふじのくに地球環境史ミュージアムは静岡県立として初の自然系博物館であり、全国初の地球環境史をテーマとする博物館である (Fig.1)。約 30 年の構想をへて 2016 年 3 月 26 日に開館した。ミュージアムは、2013 年 3 月に閉校となった高校校舎を改修して作られた博物館施設で、小・中学校ではなく高校校舎を活用した博物館は全国的にも珍しい。展示室や標本収蔵庫、研究室等はすべて一般教室や特別教室を改修したものであり、とくに学習机、椅子、黒板等といった学校什器を各所で活用した展示室では、かつての学び舎の空気が随所に漂っている。

ミュージアムの使命や目標は館名に代表されている。“ふじのくに”は富士山を擁する静岡県を示すとともに、日本という国土をも示している。静岡のローカルを知ることで、日本、そして世界を考えるという視点を目標としている。“地球環境史”は人間と自然環境の関係性の歴史と定義し、また、人類活動を長い地球史の中に位置づけ、未来を見通すことを意識している。地球規模のグローバルな課題を考える上でも、地域のローカルな事象を正しく捉えることは重要であると考え、静岡の自然とその歴史である「自然史」と、それを内包しつつ人と自然の関わり及び未来の生き方を考える「環境史」の領域を主軸とした。“ミュージアム”という語には既存の博物館の枠にとらわれない活動や展開を志向するとともに、デザイン性も重視した展示の具現化を目指す方向性を込めた。ミュージアムの概要は以下のとおりである。

名称：ふじのくに地球環境史ミュージアム
所在地：〒422-8017 静岡県静岡市駿河区大谷 5762
電話：054-260-7111
ホームページ：http://www.fujimu100.jp
入館料：一般 300 円 (大学生以下, 70 歳以上は無料),
団体割引あり
開館時間：10:00~17:30 (最終入館は 17:00)
休館日：毎週月曜日 (月曜日が祝日の場合は次の平日)

百年後の静岡が豊かであるために

ミュージアムには、明確な活動テーマが存在する。地球という大自然と共存・共栄するために人類はどうすべきか、

世界中の人たちが豊かな暮らしを続けるためには、無理や無駄のない持続可能な取り組みを考える必要がある。その中で、気候変動、人口、食料、資源、エネルギー、水、生物多様性に分類される地球環境問題というリスクを背負いながらわれわれ人間は、これからを豊かに生きていかなければならない (石田・古川, 2014)。これは、産業革命以降、利便性のみを追求してきた人間活動の肥大化がもたらしたものである。言い換えれば自然搾取型の社会構造を作り上げてきた我々が、自ら招いてしまった歪んだ自然との関係性であるともいえる。我々の未来、すなわち持続的な社会構築のためには、今後も変化しつづける自然とうまく付き合う以外の方法はない。Lewis and Maslin (2015) による、「人新世」という地質時代を作るという動きがあることも、このような世界社会の変調が 46 億年という地質時代のタイムスケール上でもエポックメイキングと捉えられることの証と考える。

全国初となる地球環境史をテーマにしたミュージアムでは、人と自然の関係について理解を深める場所として、来館者は、確かな未来をつくるために、過去を知り、郷土の自然の豊かさを実感する。そのうえで「本当の豊かさとは何か？」という問いかけに対する解を探すため、地球とヒトの歩んできた歴史を振り返りながら「考える場」とした。換言するならば、地球環境史という複雑な学問を、豊かさの本質を探す学問として表現した。

ミュージアムでは、その最適解を導くために、来館者と



Fig. 1 Exterior of the Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka.

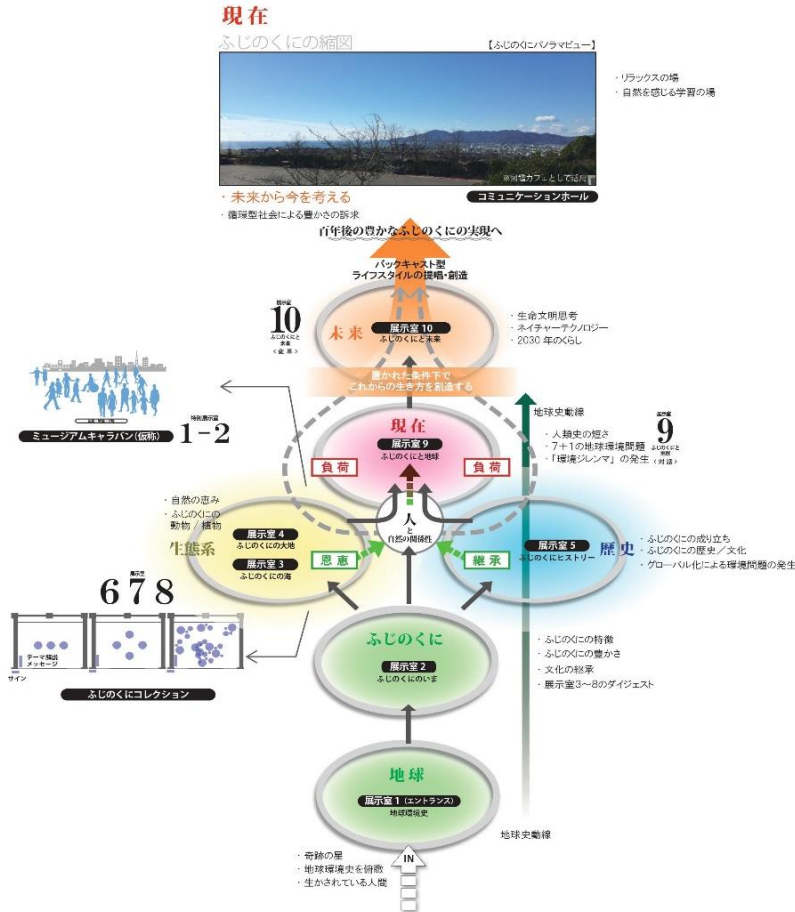


Fig. 2 Concept of exhibition of the Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka.

ともに考える場として、さらにわかりやすいキャッチフレーズとして「百年後の静岡が豊かであるために」という活動テーマを掲げた。そして、人と人のつながりを大切にするソフトパワー重視の活動を展開しながら、静岡という地域を「見る」「知る」から、「つくる」「デザインする」という未来を見据えた博物館を目標にしている。

「見る」博物館から「考える」博物館へ

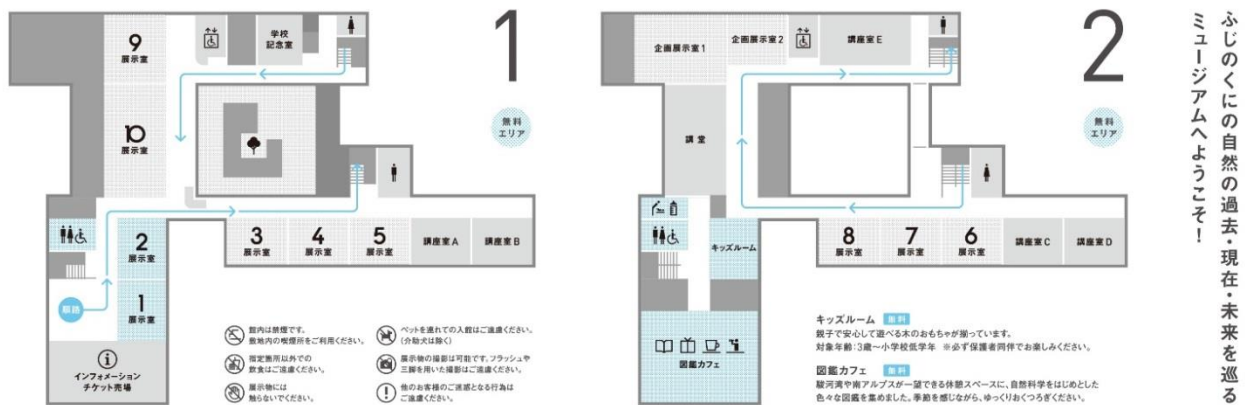
こうした理念を常設展示で具現化するために、導き出した展示手法は、「思考型展示」である。ただ、見て学ぶ展示や触るなどの体験型展示ではなく、自ら考えることで参加する新たな展示体験施設となることを目指した。展示コンセプトは「思考を拓くミュージアム」とした。

ミュージアムの常設展示は、「これからの豊かさとは何か？」という問いかけに対して、自分自身が答えを探していく仕掛けとなっており、各教室をひとつの単位とした10の展示室を順番に巡る方法となっている (Fig.2, 3)。導入の展示室1では、地球環境史とは何かを示し、「百年後の静岡が豊かであるために」何ができるかを来館者に問いかけることで、ミュージアムが課題と向き合う「考える場」であることを意識づける。展示室2~8では、静岡県という地域に視点を移し、自然の脅威や恵み、高低差 6,000m に及ぶ自然環境や生物多様性、自然と人との関係の歴史等を紹介する。単に紹介するだけでなく、多角的な視点から知

的好奇心を刺激し、考えるための様々なヒントを直感的な展示で示すなど、思考を促す仕掛けがいたるところに散りばめられている。例えば、動物のはく製が並ぶ展示室4「ふじのくにの大地」では、静岡の里山における食う・食われるという食物連鎖を多数の標本を用いてテーブル上に連鎖させて配置している (Fig. 4)。「自然を大切に」というシンプルなメッセージだけではなく原点から一歩踏み込んだ、自然と人間の新たな相互関係を考えるきっかけを忍ばせている。

続く展示室9には、対話を誘発する要素を空間に盛り込んだ。部屋の中央にはドーナツ型の会議テーブルがあり、インタープリター (サイエンス・コミュニケーター) が来館者に対して、人間活動により増大する環境問題について問いかけ、議論する。例えば、水不足の問題では「将来、使える水の量は現在の4分の1になる。さてどうする？」といった問いかけである。問題の解決に向けたヒントは、次の展示室10で展開されている。先ほどの水不足の問題では少量の水から大量の泡を作り出す昆虫・アワフキムシの生態を示しながら、10分の1の水量で泡のおふろを作る研究が紹介されている。さらに展示室10の最後の部分では未来を自分のこととして捉え、それに向けた行動を促すよう、「百年後の静岡が豊かであるために」自分に何ができるのかを記す豊カリウムという掲示板を設けた。

ミュージアムは、来館者が考えることを楽しむために、



ふじのくにの自然の過去・現在・未来を巡る
ミュージアムへようこそ!

<p>1 インフォメーション デジタル展示</p>	<p>2 地球環境史との出会い</p>	<p>3 ふじのくにのすがた</p>	<p>4 ふじのくにの海</p>	<p>5 ふじのくにの大地</p>	<p>6 ふじのくにの環境史</p>	<p>7 ふじのくにの成り立ち</p>	<p>8 ふじのくにの生物多様性</p>	<p>9 生命のかたち</p>	<p>10 ふじのくにと地球</p>	<p>11 ふじのくにと未来</p>	<p>12 地球史の旅</p>	<p>13 企画展示室</p>
--------------------------------------	----------------------------	---------------------------	-------------------------	--------------------------	---------------------------	----------------------------	-----------------------------	------------------------	---------------------------	---------------------------	------------------------	------------------------

Fig. 3 Brochure on floor map and exhibition of the museum. (Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka, 2016).



Fig. 4 Display items about terrestrial ecosystems (Exhibition room 4).

伝え手は問いかけの「種」を蒔き、来館者はその種から、思考を促し、対話を促し、行動を促す展示フローとなっている。美術館で作品を鑑賞するように、まずは展示とじっくり向き合い、考えを巡らせながら見ていただきたいという伝え手の想いは、解説文は極力少なく、展示ラベルの大きさも控えめにした展示表現になっている。

高校リノベーション

ミュージアムの特徴のひとつは、高校校舎の再活用（リ

ノベーション）である。生徒数減少による高校再編によって空き校舎となった建屋を改修して、ミュージアムはつくられた。1983年に開校した静岡県立静岡南高校の校舎は、耐震基準を満たした比較的新しい建屋であるため、屋内のみの改修で済んでいる。改修工事は、閉校後の2013年冬からはじまった。教室は展示室として、天井を外して広い空間として、間仕切り壁を窓側に新設し、遮光をおこなった。また、調理室などの特別教室は収蔵庫として、遮光フィルムや気密性を高める扉を新設した。

展示空間デザイン設計においても、高校リノベーションを一つの要素とし、展示室各所に学校の香りを残した。このことで、思考を誘発するさまざまな仕掛けを忍ばせた。来館者が、各展示室に入るとまず目にするのは、誰もが自身の経験の中で必ず目にしてしている学習机や椅子である。しかしそれらの什器は、背中合わせになっていたり、傾いていたり、通常のレイアウトとは異なる配置となっている。これは各展示室のテーマの核心を直感的に感じさせる工夫のひとつである。学校什器を活用することで、来館者に身に染み込んでいるであろう、過去の学びの経験を再び体に思い起こさせ、本来とは別の配置をすることで、考える行為を自然に誘発する仕掛けとしている (Fig.5)。

このようなデザイン性に富む思考型展示が、DSA日本空間デザイン賞2016（主催：一般社団法人日本空間デザイン協会）において、総数785点の応募作品から一番となる



Fig. 5 School furniture (desks and chairs) is used as exhibition stand (Exhibition room 3).



Fig. 6 My Museum Note. A kind of workbook for schoolchildren.

DSA 空間デザイン大賞を受賞した (DSA 日本空間デザイン協会, 2016).

今後の課題解決に向けて

思考型展示を目指したミュージアムの展示デザインでは、展示解説は簡潔かつ、訴えたいことを適切に伝えることができるよう言葉を絞りこんだものとなっている。考える行為を導くよう、心に響く、高いメッセージ性を重視したためである。そのため、情報に対して受け身の来館者や子どもにとっては、情報が不足することや、わかりづらいと感じることもあるようである。これは、思考型展示の課題である。

ミュージアムでは展示室ごとに問いかけを記したマイミュージアムノート (ワークブック) を展開し (Fig. 6), その問いかけに答えながら展示室を巡ってもらうという方法を導入することで、より多くの方に思考体験ができるよう

な工夫もしている。今後、マイミュージアムノートのコンテンツを充実させることで、より多様な思考体験を提供していきたいと考えている。

それと同時に少なめの解説を補い、「思考」をひらくためには、それを助ける「対話」も重要である。そのため、研究員等のスタッフ、ミュージアムサポーターと名付けたボランティアスタッフ、標本の整理保存業務をサポートする NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワークのメンバー、業務委託による展示監視を兼ねたサービススタッフら様々なミュージアムのメンバーと来館者の対話の充実が肝要と考える。また来館者同士の対話を引き出すことも課題である。

対話型の展示室は代表的な取り組みであるが、その他にもミュージアムの収集保管の一端である、標本作成・整理のありのままを見せる「ミドルヤード展示」、研究員による「ガイドツアー」やそれぞれの個性と専門性を活かした「マニアックトーク」等の対話の仕掛けにより、来館者の思考を引き出す工夫を行っている。

今後は来館者との対話を通じて、これらのコンテンツの質をより高めていきながら、来館者の満足度を高め、リピーターを確保することを目指したい。そのためには、人材の確保やスタッフの研鑽等、「人」を磨いてゆく努力が何よりも必要と考えている。

謝辞: 本稿をまとめるにあたり、東京大学研究総合博物館の洪 恒夫氏、株式会社丹青社の加藤 剛氏、石河孝浩氏、篠原宏一氏、山田晃裕氏、県立磐田西高校の小室桜子氏、ふじのくに地球環境史ミュージアムの渋川浩一教授、岸本年郎准教授、菅原大助准教授、高山浩司准教授、日下宗一郎主任研究員には大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

- DSA 日本空間デザイン協会, 2016, DSA AWARD2016.
<http://www.dsa.or.jp/award/award2016/> (閲覧日 19 November 2016).
- ふじのくに地球環境史ミュージアム, 2016, ふじのくに地球環境史ミュージアム案内リーフレット.
- 石田秀輝・古川柳蔵, 2014, 地下資源文明から生命文明へ, 東北大学出版会, 158p.
- Lewis, S. L. and Maslin, M. A., 2015, Defining the Anthropocene. *Nature*, 519, 171-180.

ニュース

訃報

当学会評議員の上砂正一氏は、平成28年6月7日午前9時14分に、ご逝去されました。ここに、生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

上砂さんは、長年、地質コンサルタント会社の看板技術者として多方面で活躍され、地質汚染問題にもいち早く取り組んでこられました。また、当学会には、設立当初から積極的にご参画をいただき、長年、評議員としてご活躍されてきました。社会的には、超党派水制度改革議員連盟内に置かれた第1期水循環基本法フォローアップ委員会の地下水分科会委員に選任され、地質科学の重要性を訴えてこられました。そして、何よりもその気さくな性格と独特の風貌で、多方面の方々に親しまれ、慕われてこられました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。